

4. NEUDADA について

五十嵐信一(原研)

測定核データの収録, 検索システムとしてBNLで作られたSCISRSがある。現在これはSCISRS1と呼ばれているが, 所期に反してあまり良い出来ばえではなく, そのためこれをもって来たCCDNでは大層苦勞をしたようである。SCISRSは目下SCISRS2として再

出発することになっているが、CCDNではそれまで待っているわけにも行かず、独自にNEUDADAと名づけたシステムを作ったようで、今度そのSystem Description が送られて来た。

NEUDADAはIBM360/30(64K bytes)を使って書かれている。SCISRS1がIBM7094 を使い assembler language で書かれているため他の機種への変換が不可能に近かったことを教訓とし、NEUDADAはPL/1 languageを使い小型機(360/30は小型機に属する)でも使えるように配慮している。

取り扱うデータはSCISRS1で扱ったものと今後入手されて来るもので、それらはSCISRS2が完成すれば当然SCISRS2でも扱われるものであるから、NEUDADAでもそのことは前以て予想しながらプログラムを作っている。計算機が小さく、速度もあまり速くないことから、しかもSCISRS2もそうなることを考えてdirect access deviceを十分利用している。データの測定値とデータそれぞれについてのコメントは別々のファイルに収められ、これらをつなぐものとしてインデックスファイルが用意されている。インデックスファイルにはSCISRSのkeyword(Z, A, Q, …… , Ref.)と同じものが入るようになっている。

新しい測定データをこのNEUDADAに入れる場合にはSCISRS format で用意したデータカード又はテープを使う。このインプットデータはデータとコメントに分けられる。そしてコメントの方はZ, A, ……によって分類されコメントファイルに加えられる。データの方も同様に色々の量に従って分類され、データファイルに収められる。これと同時にkeyword がインデックスファイルに収められ、今入れたデータの内容がリストされる。

要求のあったデータを取り出す場合は、keyword を使って要求するデータの内容をカードにパンチしたものをインプットする。このインプットに従ってインデックスファイルを探し、適当したkeyword も探し出した時、コメントファイルとデータファイルからそれに合った内容を引き出してアウトプットする。

以上極めて大雑把な紹介をしたが、詳しい内容を知りたい方にはCCDN/SYS2(April 1969)をおすすめする。